

今月も印象に残るさまざまな作品がありました。

離れた手私から去るセーターの青

宇井 麻千（大阪府）

手を離れた相手がセーターの色であらわされているところに、物理的にも心理的にも埋めることのできない距離が感じられて、思わず“待つて”と声をかけたくくなりました。関係性も出来事も明らかにされてはいませんが、「セーターの青」の鮮やかさが、「私」の思いを深くし、読者の目にも痛く眩しくよみがえります。

眠れないのなら

おにぎりを握ろう

溶けてゆく塩のおと

藤色（京都府）

いろんな思いが胸に訪れ眠れなくなってしまった夜。気持ちを整えるために握るおにぎり。静けさをたたえた夜のなか、「塩のおと」が、優しい音として耳に届いていることが、てのひらで「溶けてゆく」体感とともに伝わってきます。

これはただの手、

夜になるまでは

音無 早矢（北海道）

「夜」になったら「ただの手」がどんな変貌を遂げるのか。読み手の心持ちによって、おそろしいものにも甘やかなものにもなり得るところに惹かれます。

時計をはずしたあとの手首を触る

宇井 麻千（大阪府）

時計をはずして自分の手首を心細い気持ちで触っているようにも、誰か大切な人の手首を慈しむように触っているようにも読めます。感情を交えないひとつの動作の描写からしんと伝わってくる繊細な心のありよう。

海に溶けて世界に還り

私はわたしに戻ってゆく

帆志麻彩（東京都）

社会的存在の「私」から解き放たれ、宇宙内の存在としての「わたし」へ。水の中の生物から進化し、水でできた身体を持つわたしたちは、いつか水そのものとなって世界と同化したいという願いを持っているのかもしれない。

柚子シロップ
氷砂糖が溶けていく
わたしの故郷は
雪が降っている

加藤 美紀（愛知県）

溶けていく氷砂糖と故郷の雪、イメージの美しい重なり。壇のなかの小さな空間を見つめながら、雪の降る空間が大きく胸に広がってゆく。故郷への思いにしっとりと重みのある余韻が残ります。

菜箸と薄いスポンジ突っ込んで
茶渋と格闘する冬 ひとり

ベロニカ（神奈川県）

日常というのはこのようなちいさな仕事の積み重ねでできている。ささやかな作業に真剣に取り組んでいるときに、ふと訪れるひとりきりという感覚。それは、それぞれに「ひとり」である読み手の心と共鳴しあう。

異国語の
少しも分からぬその響き
広い世界の窓となる

千原（岐阜県）

意味が分からないからこそ、「響き」だけがまっすぐに届くということもあるかもしれませんね。分からないから心を閉じてしまうのではなく、「少しも分からぬ」ものが「窓」になるという明るく前向きな展開が魅力的です。

サービスエリアは
竜宮城のようで
深夜、
ざぶりざぶりと
日常が遠ざかっていく

燦嗣ひとり（愛知県）

どこかからどこかへ行くための通過点であるサービスエリアは、もともと日常から少し浮いたところに存在している。それが「竜宮城のよう」に浮かび上がる深夜、「ざぶりざぶり」と境界線が侵食されてゆくさまが印象的です。同じ作者による「隣人は人魚だろうか／午前二時壁の向こうで波音がする」にも、日常の空間からふっと異なる世界へ心地よく導かれます。

父憎む同時に自分の腕を噛む

合川秋穂（京都府）

憎む感情を抱いたとき、自分も無傷ではられない。

伝えたい言葉に似合う

息の出し方を一本選ぶ

結び目だらけの見えない糸

ヒロミヤカザル（京都府）

言葉をちゃんと伝えようとするのが、どれほど大変なことか改めて気づかされます。「結び目だらけの見えない糸」に、訥々と慎重に言葉を発する様子が伝わってきます。「結び目」には、数多の思いが留められているのでしょう。

焼き畑をじっと見る

そこになかった火

合川秋穂（京都府）

同じ作者の「沸いた鍋をみつめて／年末の余白」もですが、語り手は、「焼き畑」や「沸いた鍋」を目に映しながら、時間を見つめている。「そこになかった火」「年末の余白」に、時間的な空間の広がりを感じられて印象に残りました。

ふと触れて驚く

小さな蕾の重み

しばんで落ちた大輪の軽さ

儀間ゆみ（沖縄県）

花の重さにはその花の魂が関わっているのだと、語り手と同じくはっとさせられました。

そっと本を閉じると誰もいない冬

宇井 麻千（大阪府）

本の世界に没頭するとすべて持っていかれて、現実と違う時間を生きているようなことがありますよね。〈私〉は浦島太郎や眠り姫のように時間を超えてしまったのかもしれませんが。

ちょうどよい雑音がほしくて

耳たぶをこねて

夕日で焼くの

青野 椰栄（東京都）

目のように簡単に閉じることのできない耳。自分の聴きたい音を聴くために、身体とし

ての耳そのものに手を加えるという発想がとても面白いです。いったいどんな「音」が手に入るのか、その「雑音」を聴いてみたくなりました。

浦